



Title	尾崎翠「こほろぎ嬢」論：神経病、反逆、頭を打たれること
Author(s)	石原, 深予
Citation	阪大近代文学研究. 2014, 12, p. 32-57
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68330">https://doi.org/10.18910/68330</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 尾崎翠「こほろぎ嬢」論 —神經病、反逆、頭を打たれること—

石原 深予

## はじめに

尾崎翠「こほろぎ嬢」は一九三二（昭和七）年七月、女性文芸誌『火の鳥』に発表された。この作品は「第七官界彷徨」と並ぶ尾崎の代表作であり、若き日の太宰治が称賛したと伝えられる。先行研究では、この作品は主にフエミニズム批評の観点から次の二点について論じられてきた。まず都会の単身生活者と見られる成人女性が描かれていることから、尾崎自身の伝記事項と関わって論じられてきた。また作中で逸話が語られる詩人「ゐりあむ・しやあぶ」の心が「男のときはしやあぶのペンを取つてよき人まくろおどへの艶書を書き、詩人の心が一人の女となつたとき、まくろおどのペンを取つてよき人しやあぶへ艶書した」という「分心」と語られるモチーフに関わっても論じられてきた。ほかに精神病理学的アプローチや映画からの影響など様々な観点から論じられている。小稿ではまず、「こほろぎ嬢」における「私たち」

という語り手の特徴を確認する。この語り手は曖昧な伝聞情報に影響されながら、主人公であるこほろぎ嬢や彼女の飲む粉薬について否定的な解釈を有しつつも、実態はそうでもないと捉えているような特徴を有する。次に「桐の花」と「こほろぎ」というモチーフの造形に関する詩歌からの影響を確認し、また「ゐりあむ・しやあぶ」の逸話における古典文学や他作家による先行作品との関係も検討する。そして物語において「神經病」とされるものに着目して作品を読み進める。それらを踏まえて主人公であるこほろぎ嬢の「頭を打たれる」感覺とその孤独について考察したい。なお小稿では以後、作品名をあらわす場合には「こほろぎ嬢」とカギカツコ付きであらわし、登場人物のこほろぎ嬢をあらわす場合にはカギカツコは付けないであらわす。

## — こほろぎ嬢についての曖昧な情報と否定的な見解

語り手については、すでに先行研究において論じられてきた。近藤裕子氏は、「私たち」という語り手は、「たち」という複数性をあらわす接尾語を抱えてはいるが、囲い込んでいる複数の「私」の間に混乱や葛藤は見られない。と指摘されており<sup>(1)</sup>、竹田志保氏はこの語り手が「差異を持たない集合体であり、そこに出自も真偽も不明で、なつかつ散漫な「風のたより」や「風説」が舞い込んでいる」ことを指摘されている<sup>(2)</sup>。筆者はこれらの先行研究を踏まえて次の問題について考えたい。語り手「私たち」は信用に足るかどうか分からぬ、「風のたより」や「風説」、心理研究に熱心な医者「幸田当八氏」が発見した学説<sup>(3)</sup>といった真偽が不明である学説などをまじえつつ、この物語の主人公であるこほろぎ嬢について紹介する。しかし「風のたより」や「風説」、「幸田当八氏が発見した学説」などを受けて紹介されたこほろぎ嬢の様子は、「私たち」がその後に語る物語におけるこほろぎ嬢の様子とは、必ずしも一致しないのである。本節では語り手によつて「風のたより」「風説」として紹介される「途上の噂ばなし」について検討したい。

さて、物語の冒頭で「私たち」はこほろぎ嬢について、「知己に乏しく」「いろんな意味で儂い生きもの」と紹介する。そしてその原因を説明する「風のたより」を次のように紹介する。

風のたよりによれば、私たちの女主人がこの世に誕生したとき、社交の神、人間の知己関係を受持つ神などが、匙かげんをあやまつたのだといふ。(略)また、すこし理屈の好きな風は、私たちに向つてまことらしく言つた――この儂いものがたりの女主人の生れた頃は、丁度神々の国で、何とかといふ思想が流行してゐた。この思想のかけらが、ふと、女主人の頭の隅つこにまぎれ込んだものであらう。或は心臓の隅つこかも知れない。(略)それで、この女主人は、神々の静寂な思想のかけらを受けて、騒々しいところ、たとへば人間のたくさんにあるところなどを厭ふやうになつたのか、或は神々の騒々しい思想のために耳がつんぽになつたのかも知れない。つんぽといふものは、もともと(理屈の好きな私たちの来客は、いくらか声を大きくして、最後の断言をした)社交的性情に乏しいものである!逃避人種である!

この理屈好きの風の見解は、私たちに半分だけ解つたやう感じを与へた。(略)そして私たちは、臆ろげながら思つたことである。このものがたりの女主人は、たぶん、よほどの人間ざらひなのであらう。

このように「私たち」は、こほろぎ嬢が非社交的な人物で「つんぽ」であるかもしれないといふ「風のたより」による情報を受け、こほろぎ嬢が「よほどの人間ざらひなのである」と推測する。しかしその後に「私たち」の語る物語に

おいて、こほろぎ嬢は図書館の地下室食堂で出会った女性に自ら話しかけようしたり、彼女と会話するのが難しそうだと判断すると、心中で彼女に向かたひとりごとを言う。また、物語の中ではこほろぎ嬢が「つんば」である様子は語られない。したがって「私たち」が「風のたより」による情報をふまえてこほろぎ嬢を「よほどの人間ぎらひなのであらう」と推測したことは、必ずしも当たつておらず、またこほろぎ嬢が「つんば」かどうかは分からぬ。

次に「私たち」はさらなる「風のたより」による情報から、こほろぎ嬢が「一種の粉薬の常用者」で「これは争ふ余地もない事実であつた」と紹介する。そして粉薬の色やその副作用について「風のたより」による情報を紹介する。その後に「私たち」が語る物語においても、こほろぎ嬢の通う図書館の建物について「粉薬で疲れた頭をもさう烈しくは打たない」色であることが語られることから、こほろぎ嬢が粉薬を常用していることはうがえる。ただし粉薬の色については語られず、粉薬の色は不明である。

「私たち」は「こほろぎ嬢が粉薬を飲む原因について」「つんばの憂愁から自身を救ひだすために」「よけいつんばになるために用ひ続けるとも」という「風のたより」による情報を紹介する。しかし「私たち」が語る物語のなかでこほろぎ嬢が粉薬を飲むのは、彼女が「哀愁」をあじわい「悲しみ落胆したり」と語られる場合である。それは、こほ

ろぎ嬢が「みりあむ・しやあぶ」という詩人に心を捕らえられ調査を進めたにもかかわらず、彼についての情報を得られなかつた時のことである。彼女はある文学史の序文を読んで、彼の著作が「健康でない文学、神経病に罹つてゐる文学等」であるため出版書肆の主人から嫌悪されたことによつて、文學史の著者たちが彼を文学史から「割愛」したと知つて、悲哀や落胆をあじわつた。このようにこほろぎ嬢は「文学史の序文によつてひどく打ちつけられて」悲哀や落胆をあじわい「頭痛がひどくなつた」ために粉薬を飲むのであり、「風のたより」によつてこほろぎ嬢が粉薬を飲む原因とされていた「つんば」に関するところがらは、こほろぎ嬢が粉薬を服用する原因ではない。

さらに「私たち」は粉薬について「これは精神麻痺剤のたぐひで、悪徳の品にちがひない。健康な良心や円満なセンスを持つ人々の口にすべきものではないであらう」と否定的な見解を述べる。そしてさらなる「風説」によつて粉薬の副作用を次のように紹介する。（傍線は筆者による。）

この粉は、人間の小脳の組織とか、毛細血管とかに作用して、太陽をまぶしがつたり、人ごみを厭つたりする性癖を起させるといふことである。その果てに、この薬の常用者は、しだいに昼間の外出を厭ひはじめる。まぶしい太陽が地上にゐなくなる時刻になつて初めて人間らしい心をとり戻し、そして二階の借部屋を出る。（こんな

薬の常用者は、えて二階の借部屋などに住んでゐるものだと私たちは聞いた。)

こんな粉薬の中毒人種は、何でも、手を出せば掴み当てるやうな空気を掴まうとはしないで、何處か遠い杳かな空気を掴まうと願望したり、身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界をば彼等の身勝手な意味づけから恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑したり、つひに、映画館の幕の上や図書館の机の上の世界の方が住み心地が宜しいと考へはじめるといふことだ。

「私たち」が語るこほろぎ嬢の様子を見ていくと、たしかに、雨で「太陽もさほど眩しくはなかつたので」こほろぎ嬢が「出掛けることにした」ことや、こほろぎ嬢が「二階の借部屋」に住んでいる様子が語られる。また「何處か遠い杳かな空気を掴まうと願望」することについては、こほろぎ嬢が異国の神秘的な詩人である「ゐりあむ・しやあぶ」について図書館で調べていることが該当していると考えられよう。しかし「身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界をば彼等の身勝手な意味づけから恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑」することについては、その通りとも言ひきれない。たしかにこほろぎ嬢は、図書館の地下室食堂で出会つた女性を「もはや疑ふところもなく、先方を産婆学の暗記者と信じてしまつたのである」と語られるように、この女性に「身勝

手な意味づけ」をするが、こほろぎ嬢は彼女について最初に「恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑したり」といった否定的な意味づけをしたわけではない。むしろ「丁度いい話对手」であると、自分にとつて都合のよい肯定的な意味づけをしたり、心中ではあるが、自分の葛藤を彼女に向けて告白している。ただしその告白の中で「あなたはたぶん嗤はれるでしょう」と彼女から自分が「嗤はれる」ことを想像しており、彼女を「恐れ」ながら告白しているとは言えよう。

またこほろぎ嬢が「停車場から図書館へ運ばれた」とあることから彼女が電車で図書館へ通つていることが分かるが、こほろぎ嬢が停車場や車内等の「人ごみ」を厭う様子は語られていない。そしてこほろぎ嬢が「せつせと図書館通ひを始めてしまつた」ことから、「図書館の机の上の世界」に親しんでいるであろうことは肯われるが、これはこほろぎ嬢には図書館で調べものをするという目的があるからで、こほろぎ嬢が、「身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界」より図書館の机の上の世界を「住み心地が宜しいと考へはじめ」といっているような様子や、また彼女が映画館に通つてている様子も語られていない。こほろぎ嬢が「映画館の幕の上や図書館の机の上の世界の方が住み心地が宜しいと考へはじめ」といふことは限らないのである。

そして「私たち」は粉薬の副作用についての「風説」を受けて「この粉薬は、どう考へても、悪魔の発明した品にちが

ひない。人の世に生れて人の世を軽蔑したり煙たがるとは、何といふ冒瀆、何といふ僭上の沙汰であらう。（略）せめてこのものがたりの女主人ひとりだけでも、この粉薬の溺愛から救ひださなければならぬ」と粉薬について「悪魔の發明した品」と過剰に否定的に捉えている。しかし、「私たち」が語るこほろぎ嬢の様子は、先に述べたように必ずしも「人の世に生れて人の世を軽蔑したり煙たがる」ということはなく、また「溺愛」というほど粉薬を大量に何度も飲んでいる様子も語られていない。

以上より「私たち」が「風のたより」「風説」といった「途上の噂ばなし」をまじえながらこほろぎ嬢を紹介した内容のなかで、後に「私たち」が語るこほろぎ嬢の姿と確実に一致

するのは、こほろぎ嬢が粉薬を飲んでいることと二階の借部屋に住んでいることだけだと分かる。また「私たち」は「風のたより」より、こほろぎ嬢を「よほどの人間ぎらひ」と解釈したり、こほろぎ嬢の飲む粉薬について、曖昧な情報を得ては「精神麻痺剤のたぐひで、惡徳の品」、その副作用について「何といふ冒瀆、何といふ僭上の沙汰」と否定的な発言をする。しかし後に「私たち」が語るこほろぎ嬢の姿や粉薬は、必ずしもそうとは言えないものである。

このように「私たち」は、こほろぎ嬢が「知己に乏しく」「いろんな意味で儂い生きもの」であることについて、曖昧な情報から否定的な意味づけを重ねてゆくが、それらは後に

「私たち」自身の語るところによつて、そうとも限らないことが判明する。「私たち」は「途上の噂ばなしなどを意味もなく並べて」とも語り、「途上の風のたより」であるがゆえに、「人々はそれ等の話によつて」こほろぎ嬢を「背徳の女」と決めてしまはれなくても好いであらう」とも語る。しかしそれは「私たち」以外の人々がこほろぎ嬢について自由に解釈する余地があることを示しているのであつて、「私たち」とは、曖昧な情報に影響されながら、こほろぎ嬢や彼女が飲む粉薬について否定的な解釈を有しつつ、その実態は「途上の噂ばなし」ほどではないと捉えている語り手であると考えられる。

## 二 「桐の花」と「こほろぎ」における詩歌の影響

「桐の花」とこほろぎ嬢とは、語り手「私たち」によつて、ともに「神經病」にかかっているとされる。本節では「桐の花」およびこほろぎ嬢の名として付されている「こほろぎ」のイメージにおける、先行する詩歌からの影響について検討する。

まず「桐の花」について検討したい。桐の花は「昔から折々情感派などの詩人のペンにも止つたほど」と語られる。しかし桐の葉は中国文化の影響で日本漢詩には早くから用いられて、秋の景物として詠まれ、和歌においても『新古今和歌

集』のころから詠まれたが、桐の花は『枕草子』第二十四段で「桐の木の花。紫に咲きたるは、なほをかしきに」と言及があるものの歌材とはならず、近世になつて俳諧の四月の部に取り上げられるようになつた<sup>(3)</sup>。したがつて桐の花が「昔から」詩人のペんにとまつたというのは必ずしも適切な説明ではないが<sup>(4)</sup>、ここで想起されるのが、北原白秋の第一歌集『桐の花』(東雲堂書店 一九一三)である。白秋は学生時代からすでに歌人・詩人として名声があつたが、隣家の人に妻との恋愛による姦通罪でスキヤンダルとなり、その事件の直後にこの歌集を刊行している。恋愛のために罪に問われた白秋が「情感派」と評されることは奇異ではないだろう。またこの歌集に収録されている「さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの空に桐の匂へる」「桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさにあゆむ雨かな」という桐の花が詠みこまれた所収歌において、「桐の花」と「匂ひ」や「雨」という語が共起している。「こほろぎ嬢」においても「雨」の降っている場面での「桐の花」の「匂ひ」について語られる。また『桐の花』の「集のをはりに」には「わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。わがわかき日も哀楽も遂には臯月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。」とある。「こほろぎ嬢」の作品内での時期は五月で、桐の花も「もはや散りぎわに近」い状態であり、「臯月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき」という表現と通じあう。以上より「情感派

などの詩人」のモデルとして白秋が考えられ、また「こほろぎ嬢」における「桐の花」の造形には白秋『桐の花』所収歌や「集のをはりに」が影響していると考えられる。

次に「こほろぎ」について検討したい。「こほろぎ嬢」の物語の時期は五月であるのに、女主人公は「こほろぎ」という秋鳴く虫の呼び名で語られている。語り手は彼女が春より秋にふさわしい人物であるとして、次のように語っている。  
こほろぎ嬢の外套はさう新しい品ではなくて、丁度桐の花の草臥れてゐるほどに草臥れてゐたのである。(略)  
こほろぎ嬢の様子は(略)あまりくつきりと新鮮な風采ではなかつた。そして外套の中の嬢自身も、私たちの眼には、やはり外套とおなじほどの新鮮さに見えた。

こほろぎ嬢の風姿は、それはあまり春の光景にふさはしいものではなかつた。嬢の後姿を包んでゐるものは、一枚の春の外套であるとはいへ、もはや色あせて、秋の外套の呼名にふさはしい色あひであつた。そして私たちは、こほろぎ嬢の風姿をいつそ秋風の中に置きたいと思つたことである。

草臥れ色あせた外套、その外套と「おなじほどの新鮮さ」に見えるという、「嬢」と呼ばれるとはいえ、すでに若くはないと思われるこほろぎ嬢は「秋風」の中にいるのがふさわしいという。

『角川古語大辞典第一卷』（一九八二）によると、「こほろぎ」という語は上代では現在の「おろぎ」を中心として、きりぎりす、松虫、鈴虫など秋鳴く虫の総称として用いたものらしい。また平安時代以降の雅語としての「きりぎりす」は、その用例から見て今日の「おろぎ」と考えられる。さて大谷雅夫氏によると<sup>(5)</sup>、漢詩では「蟋蟀」と「秋風」とが取り合わせて詠まれることが多く、風が秋の訪れを知らせ、こおろぎが鳴きはじめるという連想があつたという。その影響を受けた『萬葉集』中の歌として「秋風の寒く吹くなへ我がやど」の浅茅がもとにこほろぎ鳴くも（巻十・二二五八）を挙げられている。また「中国古代の詩には時の推移を悲しむ心が繰り返し詠われる。特に秋の詩は、悲哀一色に染められると言つて過言ではない。詩語の「蟋蟀」もまた、悲しき秋の訪れ、一年の暮れを告げるものとして、人の悲哀の情をたちまちに引き起すものであった」ことに對して、『萬葉集』の歌では秋は悲しみの季節では決してなく、「こほろぎ」の声も秋の楽しく美しい音として聴き取られていたことを指摘されている。高柳祐子氏は<sup>(6)</sup>、『萬葉集』と『古今和歌集』との「きりぎりす（こほろぎ）」詠の違いとして、後者に漢籍由來の「悲秋」の觀念が定着し入り込んでくること、こほろぎの鳴き声が我が身に悲しみをかきたてるものとして詠まれるようになつたこと、また「きりぎりす」詠のそのような特徴は、「きりぎりす」のみではなく「虫」詠一般に広

く認められることを指摘されている。また院政期において和歌での「きりぎりす」は用例が増加し、他の虫と異なる独自の詠みぶりがあらわれはじめ、その特徴の一つとして「晚秋の「きりぎりす」」が詠まれることを挙げられている。鳴き弱る虫の声に美を見いだすことを詠んだ歌は院政期以前にも見られたものの、院政期に格段に増加するという。また新古代には「晚秋の虫」として詠まれることが圧倒的に多くなるという。

ここで『新古今和歌集』<sup>(7)</sup>所収の次の歌を確認したい。（詞書）枯れゆく野べのきりぐすを（作者）中務卿具平親王（歌）秋風にほるゝ野べの花よりもむしの音いたくかれけるかな（訳）秋風に吹かれて弱り枯れる野の花よりも虫の声の方がひどくか（嘆）れてしまつたことだ。（巻第五 歌下 五一〇）

桐の花とこほろぎ娘とは「こほろぎ娘の外套はさう新しい品ではなくて、丁度桐の花が草臥れてゐるほどに草臥れてゐたのである」「外套の中の娘自身も、私たちの眼には、やはり外套とおなじほどの新鮮さに見えた」というように、ともに否定的なイメージでの年老いた、古びたイメージを持つものとして語られる。このような桐の花やこほろぎ娘の姿の背後には、この物語が雨の日の出来事であることからも、小野小町の古歌「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」を想定してもよいだろう。しかし「桐

の花」は纖弱とはいえ肯定的に語られる「芳香」を発している。一方「こほろぎ嬢」が音声を発する様子については肯定的には語られない。『新古今和歌集』五一〇番の和歌において「野べの花」が「枯」れるよりも「むし（きりぎりす）」（こほろぎ）の音の方がひどく「嗄」れてしまった」よう、に、「こほろぎ嬢」の物語においても「（桐の）花」よりも「こほろぎ（嬢）」の方が、より「かれ」てしまつた（死に近い）状態である。この和歌も「こほろぎ嬢」の設定の背後に想定されるのではないだろうか。

また桐の花の色に着目すると、桐の花は薄紫色であるが、こほろぎ嬢の飲む薬の色は「黄色つぼい」という風説があり、「神経病に罹つてゐる文学」作品には「黄色い神経派」と称される一派による作品がある。紫と黄色とは補色関係にあるが、自然の摂理にそつて散つてゆこうとし、散りぎわに近くてもなお「芳香」を発する桐の花の色である「紫」と、この作品において「神経病」という性質をあらわす「黄色」とは対照的である。

次に近代詩では島崎藤村『若菜集』（春陽堂 一八九七）の「おきぬ」に「あゝあるときは吾心／あらゆるものなげうちて／世はあぢきなき麻茅生の／茂れる宿と思ひなし／身は術もなき蟋蟀の／夜の野草にはひめぐり／たゞいたづらに音をたてゝ／うたをうたふと思ふかな」とあり、「うたをうたふ」という擬人的表現で「おろぎの鳴く声が表現されてい

る。また川崎賢子氏は<sup>(8)</sup>『若菜集』より「君がこころは」で乙女の感傷をこおろぎに例えた次の詩行を紹介されている。「君がこゝろは蟋蟀の／風にさそはれ鳴ぐごとく／朝影清き花草に／惜しき涙をそゝぐらむ」。この詩の続きは「それかきならず玉琴の／一つの糸のさはりさへ／君がこゝろにかぎりなき／しらべとこそはきこゆめれ」であるが、琴の材料は桐であり、この詩では「こほろぎ」と「桐」とが共存していると言えよう。（筆者注：『若菜集』からの詩の引用の改行は「/」で示した。）

北原白秋にも「こほろぎ」という詩があり、初出は第一次『新思潮』第六号（一九〇八・三）、のち詩集『邪宗門』（易風社 一九〇九）に収録された。この詩の初出誌には尾崎翠「地下室アントンの一夜」の典拠の一つと考えられるチエホフ『決闘』（小山内薰訳）が掲載されている。この詩では「微（ほの）に」「こほろぎ啼ける」様子とともに、人間が野で戦い悲惨に死んでいくさまが描かれている。

また河井醉茗の詩「こほろぎ」で描かれている「こほろぎ」の形象も「こほろぎ嬢」の発表された時代の「こほろぎ」のイメージとして目をとめてよいのではないだろうか。河井醉茗「こほろぎ」は詩集『霧』（一九一〇 東雲堂）に収録され、のちに『醉茗詩集』（アルス 一九二三）に収録された。この詩は大正末期には国語科教材に収録されていたため<sup>(9)</sup>、広く知られていたと考えられる。この詩において「こほろぎ」

は雨の降る中で「鳴く」「うたふ」様子が描かれ、「さびしさ」や「つらさ、かなしさ」と関連づけて表象されている。詩は「こぼろぎの吹鳴らす／銀色の笛に聞惚れて／さまよひ出づる／さびしい姿を／つくづくと見る／あはれなうたの抱き心」（筆者注：改行は「／」で示した。）と閉じられ、「あはれなうた」の心を呼び起す虫としての「こぼろぎ」の姿が印象づけられる。

このように古典詩歌での表現を受け継ぎ、近代詩においても「こぼろぎ」は声の美しい鳴く虫として、また「世はあぢきなき」「涙をそゝぐ」「つらさ、かなしさ」など、もの悲しき心情とともに表現されている。そして鳴き声の美しさから歌をうたう、あるいは楽器を演奏するという擬人法によって表現されるようになつた。「こぼろぎ嬢」における「こぼろぎ」という語も、このようなおろぎのイメージを踏まえられていると考えられる。図書館での調べ物で「悲歎」「哀愁」をこぼろぎ嬢はあじわい、その悲哀を「大きい声で歌をどなるとか、会話をするとか、或はパンを喰べ」ることによつて癒そうと考え、「いま、せめてパンを喰べてみよう」と地下室食堂へ行く。そこで「会話を忘れかゝつた」こぼろぎ嬢は「パン屋の店の女の子」にパンを注文するに際して「無愛想な音」を吐いて呆れられ、「産婆学の暗記者」の女性には声を出さないで心の中で話しかけるだけである。彼女は「大きい声で歌をどな」つたり、美しい声をゆたかに発するどころ

か、自然な会話もなすことがない。こぼろぎ嬢はもの悲しい心境にある人物として語られるが、「こぼろぎ」という名で呼ばれるにもかかわらず、その名に似つかわしくなく、音声をゆたかに発しない。これが彼女について「神経病」に罹つていると語られる所以であろう。

最後に海外の文献における「こぼろぎ」についても確認しておきたい。「こぼろぎ」の古語は「きりぎりす」であるが、石井和夫氏は<sup>(10)</sup>「こぼろぎ嬢」の作品末尾での「産婆学の暗記者」という実学を学ぶ女性と、無用のことばかり考えているこぼろぎ嬢との対比から、イソップ寓話の「アリとキリギリス」の働き者と享楽家の対比を連想している。また川崎賢子氏は前掲書において幸田露伴や寺田寅彦が「アリとキリギリス」のキリギリスを「蟋蟀」と表記していたことを指摘している。日出山陽子氏は<sup>(11)</sup>尾崎が読んだ可能性のある小泉八雲「草雲雀」における「世には歌はんが為めに自分の心臓を食はねばならぬ人間の蟋蟀が居る」という一文を「こぼろぎ嬢」と関連づけて考察している。ほかに、北欧・南欧では「こぼろぎ」は詩人のたとえとしてよく用いられるという<sup>(12)</sup>。「こぼろぎ嬢」においてこぼろぎ嬢が詩人であることは明示されないが、こぼろぎ嬢が関心を抱いたりあむ・しやあ。ふについての「古風なものがたり」の中に「東洋の屋根部屋に住む一人の儚い女詩人が、彼女の儚い詩境のために、異国、水晶の女詩人を、粗末なベンにかけぬとも言へないの

である。」とあり、「こほろぎ嬢の恋」と通じ合っている。「こほろぎ」という女主人公の名は、彼女が詩人であることを暗示している可能性もあるだろう。

### 三 「古風なものがたり」と「どつぺるげんげる」

#### ——「ほろぎ嬢の恋と反逆

本節ではこほろぎ嬢の「恋」の対象であるありあむ・しやあぶという異国の詩人についての「一篇のものがたり」(以下本章では「しやあぶの物語」と称する)における先行作品との関係について検討したい。

#### (一) 「古風なものがたり」と「伊勢物語」・七夕伝説

「しやあぶの物語」は「むかし 男女、いとかしこく思ひかはして、ことごころなかりけり」という「古風な書出し」の物語であると紹介されるが<sup>(13)</sup>、この文は『伊勢物語』第二十一段の冒頭部と全く同じである。またこの物語は「ありあむ・しやあぶ」という異国の詩人と「ふいおな・まくるおど」という女性詩人との恋物語である。二人には「こころをこめた艶書のやりとり、はては詩のやりとり」があつたことから、語り手「私たち」はこれらを踏まえたためか「私たちの國のならひにしたがへば、たぶん」と『伊勢物語』第三十八段の和歌の贈答部分「君により思ひ習ひぬ世の中の人はこ

れをや恋といふらむ」「かへし 習はねば世の人」と何をかも恋とはいふと問ひし我しも」を引用して、そのような「歌にも似た詩のやりとりがあつたのであらう」と推測する<sup>(14)</sup>。しかし『伊勢物語』第三十八段の和歌の贈答は男女のやりとりではなく、男性同士の友人関係において、恋心にたとえた楽しい贈答がなされたものである。これまでにも語り手「私たち」が「風のたより」や「風説」、幸田当人の学説などを引用、紹介してこほろぎ嬢を説明する場合、必ずしもそれらが「私たち」の語るこほろぎ嬢の様子にそぐわないことについて考察してきたが、ここで語り手「私たち」が参照する『伊勢物語』第三十八段も、男女の恋仲でのやりとりの例示とするには適格ではない。

しかし『伊勢物語』のこの部分を例示することには、「しやあぶの物語」を具体的に紹介するに先立ち「しやあぶの物語」に関わって、異性愛という枠組みに依らない関係性や、あるいはジェンダーによる同性同士の連帶というホモソーシャル関係に依らない関係性を示しているとも考えられる。「しやあぶの物語」に登場する「余等」というしやあぶの友人知人らは「こほろぎ嬢」の語り手「私たち」同様に一人称複数形でありながら、複数の「余」の間で混乱や葛藤は見られない。「余等」は男女の関係における「接吻のこと寝台のこと」を互いに語りあいたがり、しやあぶの死後はまくるおどを探し「床まきの香料はどれにしたものか」と女性を共有し

ようとする。それに対しても「しやあぶは「余とふいおなに接吻が何であらう」と男女の肉体関係に重きをおかない価値観を持ち、二人の関係を「たがひに寄り添ふて、大空の恒星を見てゐた」と語り、二人は「太陽のあゆみや遊星のあそびに詩魂を託す」という、詩についての価値観を共有していた。渡邊綾香氏は<sup>(15)</sup>「しやあぶの物語」のなかで、しやあぶと友人らには心の距離があり、しやあぶが女性を媒介とする男性同士というジエンダーによる連帯、ホモソーシャル共同体からの離脱をはかり、別の価値（詩境）による理解者を求めることを指摘している<sup>(16)</sup>。しかし別の価値（詩境）による理解者をしやあぶが求め、それがまくろおどによって得られていたとしても、しやあぶとまくろおどとの関係が「恋愛」と語られるところに、異性愛という枠組みの持つ強力さが見られよう。

「しやあぶの物語」は、「古風な」物語とされ、「女性が男性に逢いにいく」というモチーフの物語であり、しやあぶは星々など「天文」のことばかり話したり詩に書き、しやあぶが死んだときには友人らが「つひに天上してしまつた！」（略）まるで故郷に還つたつもりであるだらう！」と言つている。これらより「しやあぶの物語」は、陰暦七月七日に天の川を渡つて、年に一度織女星が牽牛星に逢いに行くという古代中国の七夕伝説の物語に類似しているとも考えられる。そうすると「秋風」「こほろぎ」とともに「七夕」という和歌で秋

に詠まれる景物が、晩春の物語である「こほろぎ嬢」の作中に配置されていることになる。「こほろぎ（嬢）とともに「七夕」の物語に類似する「しやあぶの物語」は、とともに「晩春」という季節から外れている。このように両者が季節外れの存在することは、両者が「神経病」と評されるような健康とされる状況にはないことや、第五節で論じるこほろぎ嬢としてあぶの孤独感や儂さを、象徴的に表しているとも考えられる。

## （二）「どつべるげんげる」、火星、反逆

「しやあぶの物語」では、しやあぶの生きていた間、しやあぶとまくろおどとの間の「艶書のやりとりは、間ちがひのない事実であつた」と語られる。しかししやあぶが死んだ時は「ひとつのがたで両つのたましひが消えて」、まくろおどは「ゐりあむ・しやあぶの骸のなかに、肉身を備へない今一人の死者として「横たわつていたこと、「ふいおな・まくろおどは、まつたく幻の女詩人であつた。詩人しやあぶの分心によつて作られた肉体のない女詩人。」「分心詩人ゐりあむ・しやあぶの心が男のときはしやあぶのペニスを取つてよき人まくろおどへの艶書を書き、詩人の心が一人の女となつたとき、まくろおどのペニスを取つてよき人しやあぶへ艶書した」ことが語られる。

この二人の不思議な現象は「しやあぶの物語」では「どつ

「へるげんげる」と語られているが、一般的にいうドッペルゲンガー（自己二重身）の現象とはかけ離れている。<sup>(17)</sup> しやあぶのせりふには、「ふいおなと余は寄り添ふて」「接吻はした」とあり、まるでまくるおどが肉体を持つてゐる人物であるかのように語られているが、一方でしやあぶは、「余のふいおなは、余の心臓より抜けいだし、行方もわからず」「もう、旅に行つてしまつた」と、自分の心臓の中にまくるおどが存在してゐて、それが自分から出ていくようにも語る。またしやあぶの友人らは、しやあぶの家やしやあぶの葬列の折に「つたんかあめん時代」から伝わる香料の「香氣」を感じ、それをまくるおどの存在の証左とするが、「香氣」がしてゐるだけで、それがまくるおどという人物が実在する証拠となるわけではない。しやあぶのせりふから考えれば、意識を保つたまま靈とやりとりをするタイプの靈媒のような経験をしやあぶがしているようでもあり、「心が男のときは」「心が一人の女となつたとき」という説明から考えれば、「二重人格や憑依、自動書記」といった現象のようでもある。<sup>(18)</sup> このことについては第四節で再度検討するが、「余等」によつてしやあぶが「氣体詩人」と言われることと関わつて、「しやあぶの物語」の背後に想定される可能性のある作品を二つ確認しておきたい。

まず、尾崎翠も読んだ可能性のある芥川龍之介「侏儒の言葉」の中の「火星」という短文である<sup>(19)</sup>。尾崎翠「詩二篇

「神々に捧ぐる詩」のうち一篇「キリアム・シャアブ」には、「火星の人たち」が使う言葉は「フイオナ・マクロオドの詩の言葉」で、「火星の人間はみんな氣体詩人さ」という箇所があるが、「火星」で書かれている火星の人間にについての記述は「こほろぎ嬢」や「キリアム・シャアブ」の典拠として想定される可能性がある。次に「火星」の全文を紹介する。

火星の住民の有無を問ふことは我我の五感に感ずることの出来る住民の有無を問ふことである。しかし生命は必ずしも我我の五感に感ずることの出来る条件を具へるとは限つてゐない。もし火星の住民も我我の五感を超えた存在を保つてゐるとすれば、彼等の一群は今夜も亦篠懸を黄ばませる秋風と共に銀座へ來てゐるかも知れないのである。

ここで「火星の住民」が「秋風と共に」地球へ來ているとあることに注目したい。「神々に捧ぐる詩」のうち、もう一篇「チャアリイ・チャツプリン」では、「あきかぜとともに」という詩句が何度も用いられる。また「こほろぎ嬢」においても「秋風」は「この古風な一篇を読み進んだこほろぎ嬢は、身うちを秋風の吹きぬける心地であった。このやうな心地は、いつも、こほろぎ嬢が、深くものごとに打たれたとき身内を吹きぬける感じであつて（略）秋風の吹きぬけたのちは、もはや、こほろぎ嬢は恋に陥つてゐる習ひであつた。対手はいつも、身うちに秋風を吹きおくつたもの、こと、そして人で

あつた。」とあるように、こほろぎ嬢にしやあぶへの「恋」をもたらす重要なモチーフとして登場する。

また「火星」には「火星の住民」について「我我的五感を超越した存在を保つてゐるとすれば」とあるが、「しやあぶの物語」におけるふいおなが「五感を超越した」存在であるとすれば、「みすてりの詩人」であるしやあぶも五感を超越した感覺を有していたために、ふいおなの存在を感知して交流できたとも解釈できるだろう。

次に、『火星界の実況』（大蔵館、一九一〇）という書籍について確認したい。先にしやあぶとまくるおどとの関係について、しやあぶが靈媒のような経験をしているか、あるいは二重人格や憑依、自動書記といった現象のようでもあることを指摘したが、「火星語」を話し、書いた靈媒としてエレー・ヌ・スミスが挙げられる。彼女の語る火星の物語などをノートに書き溜めた心理学者のテオドール・フルールノワは、その記録をもとに一九〇〇年『インドから火星まで』を出版し、歐米で話題となる。日本でも渋江易軒によって翻案され一九一〇年に『火星界の実況』という題で出版された。尾崎翠がこの本を知っていたかどうかは定かではないが、神秘的な現象として火星の言葉を用いた人間がいるという発想が、尾崎翠の独創とは限らないことが分かる。

さて「しやあぶの物語」の終わりには「東洋の屋根部屋に住む一人の儂い女詩人が、彼女の儂い詩境のために、異国、

水晶の女詩人を、粗末なペンにかけぬとも言へないのである」とあり、またそのような詩人や心理医者は「冒瀆人種」で「いつの世にも、彼等は、えるすとみゆうずの神の領土に、まいなすのみを加へる者どもである。彼等が動けば動くだけ、ありあむ・しやあぶの住んでゐたみすてりの世界は崩されるであらう。」と閉じられる。こほろぎ嬢は「しやあぶの物語」で語られる東洋の女詩人のように、しやあぶのことを調べ、ノートに書こうとする。こほろぎ嬢のこのような行為を末國善己氏は「対価を払つてまで、確信的かつ主体的に」「薬の副作用」という要素を越えて、自ら選択しているとも考えられる」と指摘されている<sup>(20)</sup>。こほろぎ嬢は「しやあぶの物語」の語り手の、「えろすとみゆうずの神の領土」というしやあぶが住んでいた神秘的な世界が明らかにされることを望まない価値観に反逆して、「恋」に陥り興味を喚起された相手について主体的に知ろうとしているとも言えよう。

#### 四 「こほろぎ嬢」における神經病者たち

本節では「こほろぎ嬢」において「神經病」に罹つているとされる者たちについて検討したい。まず、こほろぎ嬢がしやあぶについて図書館で調べている時に読んだ文学史の序文にあつた「神經病に罹つてゐる文学」について検討する。次に「神經病に罹つてゐる文学」をふくめ、「こほろぎ嬢」に

おいて「神經病」とされる者たちについて検討し、この作品に登場する者の多くが「神經病」とされるか「神經病」に類する性質を持つていていることを確認する。

### (一) 「神經病に罹つてゐる文学」について

こほろぎ嬢は図書館でしやあぶについて探索するが、彼は「影の薄い詩人」であり、書物の中で彼の存在は見つかりにくく「深い悲歎に暮れ」た。こほろぎ嬢は語り手「私たち」によつて「儂い生きもの」であると紹介されたが、しやあぶもまた「儂い」詩人であると言える。

またこほろぎ嬢が「哀愁」を感じた文学史の序文には「健康でない文学、神經病に罹つてゐる文学」が「出版書肆の主人」の思想に合わせず嫌悪に値するため、序文の著者によつて「割愛」されていた。その文学とは「考へる葦のグルウプ」「黄色い神經派」「コカイン後期派」で、また「おすか・わいるど氏は背徳の故」「ゐりあむ・しやあぶ氏は折にふれ女に化けこみ、世の人々を惑はしたかどにより」割愛された。これらの文学とは具体的にどのようなものが想定されるかを確認したい。

まず「考へる葦のグルウプ」という名前からパスクアル・パンセ<sup>1</sup>が想起されるが、尾崎翠「詩二篇 神々に捧ぐる詩」の「キリアム・シャアブ」においても、「さはれキリアム／にんげんは／まこと、考へる一本の葦／一本の／瘦せた／も

のを考へる葦／一本の植物、細いあしのなかに／たましひは宇宙と広い。(筆者注：改行は「／」で示した)」とあり、「考へる葦」というグループ名は「瘦せた」「細い」という儂い印象をもたらしながらも「たましひは宇宙と広い」と矜持や尊厳を同時に示していると見られよう。また「黄色い神經派」とは典拠が分からぬが、こほろぎ嬢の飲む粉薬は黄色といふ説もあることから、「黄色い神經派」の「黄色」も神經を病んでいることを示す色として用いられていると考えられよう。「コカイン後期派」については、コカイン常用者であった作家を確認すると、二重人格の代表的な小説「ジキル博士とハイド氏」を書いたステイーブンソンが挙げられる。この小説でジキル博士が用いる秘薬もコカインである。その他に、火星人が地球に攻めてくる小説「宇宙戦争」の著者ウエルズ、「椿姫」の著者デュマ、SF作家のジュール・ヴェルヌらが挙げられよう。「文学」の作家ではないが、フロイトもコカインを用いた。そして「サロメ」等の著者であるオスカー・ワイルドの「背徳行為」とは同性愛のことと考えられる。なおアラ・ナジモヴァが主演した映画「椿姫」「サロメ」を尾崎翠は「映画漫想(三三)」(『女人藝術』一九三〇・六)で熱く語り高く評価している。

先に「しやあぶの物語」で語られるしやあぶとまくろおどの関係について、二重人格の症例のようでもあること、また「火星」に関連することを指摘したが、コカイン常用者であ

つた作家には、二重人格や火星に関係する作品を書いた作家らが含まれていた。また「サロメ」や「椿姫」のように、作品の最後に悪女とされるヒロインの女性が不幸な亡くなり方をする作品の作者も挙げられているが、「これは『こほろぎ嬢』の最後で、こほろぎ嬢による『産婆学の暗記者』と想定された女性に向けた独白に『暁がたのこほろぎを踏んで、あなたの開業は毎朝繁盛しますやうに。』とあることと関わって考えられよう。

こほろぎ嬢は心ならずも経済的に田舎の母親を頼らざるを得ない状況にありながらも、「ねんぢゅう、こほろぎなんかのことが気にかかり」、それゆえ「何の役にも立たない事ばかり」考えていた。「こほろぎ嬢」の物語のなかで、こほろぎ嬢が考えていた「何の役にも立たない事」とは、しゃあぶることを指していると思われる。したがつてこの独白における「こほろぎなんかのことが」「気にかかる」とは、こほろぎ嬢がしやあぶに「恋」をしたことを暗示しているのではないか。さういふに「恋」を踏んで」とは、こほろぎ嬢の「恋」の相手であるしやあぶの作品やしやあぶについての記載が本のなかに見つからず、その「恋」が徒労であることや、彼女がその「恋」のために不幸な目に遭うと自ら想像していることの暗示とも考えられよう。またこほろぎ嬢は「何の役にも立たない事」

を考える元となつた「こほろぎ」が、産婆という「役に立つ実業に携わると想定した女性に踏まれて、その仕事が「繁盛しますやうに」と願つていて。産婆が繁盛するということは出産する女性がたくさんいるということであり、その背景には女性たちの恋の成就や、生まれた赤子が健康に発育すること等も想定される。こほろぎ嬢は「サロメ」や「椿姫」のヒロインとは異なり「悪女」とされるような人物ではない。しかしサロメや椿姫と同様に、こほろぎ嬢も出産につながるような「恋」をするわけでもなく、その「恋」はうまくゆかない。また「霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法」を願うこほろぎ嬢と、「産婆学の暗記者」として想定される女性の将来の産婆としての繁盛とは対照的であり、こほろぎ嬢の自己否定的な心境がうかがわれる。

またフロイトと「こほろぎ嬢」における幸田当八とは「分裂」心理研究に熱心」な同業者である。末國善己氏は前掲論文において幸田当八が語り手「私たち」によつて「神秘の神に多少の冒瀆」を働くとされたことについて、「フロイティズムを批判したカトリシズムの言説を彷彿とせるものがある。また、実験対象の「若い女の子」と対面して「心理変化」をうかがうという手法は、やはりフロイト派の「自由連想法」や「対面療法」を思い起させる」と、「こほろぎ嬢」发表当時の一九三二年の時点の日本では、「幸田氏の学説」は「医員」としては異端の学説を研究していたといわざるを

得ない」ことを指摘されている。

もう一つ、オスカー・ワイルドの背徳行為が同性愛を指しているとすれば、それは「しやあぶの物語」に関わって語り手の例示した『伊勢物語』第三十八段の、男性同士の友人関係における異性愛のパロディとしてのやりとりに呼応していると考えられよう。竹内佳代氏は「同性愛作家である「おすか・わいるど」も列举されていることは、そうした排除の一端が、近代家父長制下のジェンダー規範と、それを基盤とする異性愛イデオロギーがもつ排除構造、すなわち女性嫌悪と同性愛嫌悪の交差に因っているのを明確に映しだしている。」と論じられている<sup>(21)</sup>。さらにリヴィア・モネ氏は、ナジモヴァアの「サロメ」は、そのような排除構造へ反逆するような「アーリー・フェミニズム」とレズビアンの色の強いアート、あるいは女性中心の大衆現象を復活させながらパロディ化した作品としても見做すべき」また「女たちの想像の共同体」が垣間見えるものとして論じられている<sup>(22)</sup>。

以上をまとめると、「神経病に罹つてゐる文学」とされた作品には、「しやあぶの物語」で語られるしやあぶとまくろおどに關わるような二重人格や火星に關係する作品、幸田当八に關わる異端の学説、そしてこほろぎ嬢の最後の独白に關わるような「恋」によってヒロインが不幸な最期を遂げる作品などが含まれていた。これらには魅力的であつても日常現実からかけ離れた事象や人物、また不気味で怪しい事柄や

不幸な出来事も描かれている。しかし他方で「神経病に罹つてゐる文学」とされた作品には、「たましひは宇宙と広い」「女たちの想像の共同体」といった精神的に広々とした自由さや解放感、新たな連帶の可能性が表現されているような、肯定的なニュアンスで評される作品も含まれていた。「神経病に罹つてゐる文学」とはこのような両義性を持つものと言えるだろう。

## (二) 「こほろぎ嬢」における神経病者たち

「こほろぎ嬢」において「神経病」に罹つているとされたものは、粉薬を飲みすぎたことがその原因と語られるこほろぎ嬢のほか、桐の花、そして「神経病に罹つてゐる文学」とされた作品である。このような文学作品の作者には「ありあむ・しやあぶ」も含まれている。したがつて「ふいおな・まくろおど」も「神経病に罹つてゐる文学」作品の作者に含まれよう。

なお「粉薬」「桐の花」「まくろおど」には「白」で表されるという共通点がある。粉薬の色ははつきりせず、「褐色」「黄色」とも語られるが、「白い細かい結晶体」とも語られる。雨日の桐の花の匂いは「ひと頃よりは幾らか白っぽく褪せ漂つてゐた」と語られ、「まくろおど」は「白っぽいみすり派の詩」を書いていたと語られている。  
ところで、こほろぎ嬢が図書館の地下室食堂で出会い、話

しかけようとした女性は「黒っぽい痩せた」女性であると形容されている。こほろぎ嬢はこの女性を根拠なく「産婆学の暗記者」と信じこんでしまう。多くの先行研究で「産婆学」は実学で「産婆」は女性が経済的に自立できる職業であり、経済的苦境にあるにも関わらず「年中何の役にも立たない事ばかり考へてしまつたこほろぎ嬢とは対照的であることが論じられてきた。しかしこの「産婆学の暗記者」は、こほろぎ嬢のありかたに対し実学的であることや生活力の点においてのみ対照的ではなく、白と黒という付与されている色彩イメージからも対照的であり、「神経病」に対して、神経病ではない、健康さが象徴されているのではないだろうか。とはい別の観点からは「産婆学の暗記者」は、「桐の花」や「まくろおど」やこほろぎ嬢と類似する存在であるとも考えられるのである。「産婆学の暗記者」は「地下室の片隅」で鉛筆を削っていた、「地下室の一隅のもつとも薄暗い中」にいた人物であると語られるが、桐の花は「原っぱの片隅に一群れ」咲いていたのであり、まくろおどは「人に知られない何處かの片隅に生きて」いた。またこほろぎ嬢の住まいも「二階の借部屋で、三坪の広さ」であるところから、こほろぎ嬢も世界の「片隅」に生きている存在と考えてよいだろう。彼女らは皆世界の「片隅」で生きているのである。そして産婆とはかつて「魔女」と見做され迫害された女性でもあつた<sup>23</sup>。「悪魔の粉薬」が原因で神経病になつたと言われ

るこほろぎ嬢と、用法によつては幻覚を見せるような薬物を用いて出産をサポートすることで魔女と見做された「産婆」とは、中毒者と医療者という立場の違いはあれども薬物に付随する魔術性に関わるという共通点を持つ。

また「産婆学の暗記者」はこほろぎ嬢から「未亡人」と見做されることより、若くはない、盛りをすぎた女性であると考えられる。この点で「色褪せた」桐の花や、「桐の花の草臥れてゐるほどに草臥れてゐた」外套を着て「外套とおなじほど的新鮮さに見えた」と語られるこほろぎ嬢とも共通する。そして「産婆学の暗記者」は「黒っぽい痩せた」女性で、「腰の太い」と「余等」から推測されていた（実は肉身が存在しなかつたが）「まくろおど」の豊満な女性イメージとは対照的に、貧弱なイメージで語られる。

以上から「産婆学の暗記者」は「健康」という属性を担い、こほろぎ嬢から将来の産婆としての開業の「繁盛」を願われてもいるが、他方では「神経病」と語られる三者に加えて彼女もまた「片隅」でひつそりと存在していた者であり、「神経病」者に類するような魔術性に関わるという側面をも有する、両義的な存在であると言えよう。

本節での検討より、語り手によつて「神経病」に罹つてゐるとされるこほろぎ嬢、桐の花、いやあぶ等の「神経病に罹つてゐる文学」だけではなく、幸田当八や「産婆学の暗記者」も「神経病」に類する存在であることが分かる。

さて、先に論じたように「神經病」とされる文学作品は「たましひは宇宙と広い」「女たちの想像の共同体」といった肯定的な意味でとらえることも可能であった。しかしこほろぎ嬢は、前節で論じたような反逆的な心情を有してはいても、そのような肯定的な可能性に目を向けるのではなく、文学史の序文を真に受けて読んで「頭痛がひどく」なるという生命力が弱められる状態になる。このような弱つた状態でこほろぎ嬢は地下室食堂へ降りてゆき、粉薬を飲み、パンを食べて「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる事實をも忘れてゐる様子」となり、失調を回復させたあと、「産婆学の暗記者」を想像の中での会話の相手として独白をする。次節でこの独白について検討したい。

## 五 頭を打たれる感覺、こほろぎ嬢の孤独

### (一) こほろぎ嬢の頭痛、「私たち」と「母」との共通性

こほろぎ嬢は粉薬の飲みすぎによる「神經病」であると語られるが、こほろぎ嬢の症状は頭痛である。この頭痛については次のように語られている。「粉薬で疲れた頭をも、さう激しくは打たない。」「こんな序文がこほろぎ嬢にとつて何の役に立つであらう。頭痛がひどくなつただけであった。人間とは、悲しんだり落胆したりするとき、日頃の病處が一段と重るものであらう。」「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる」。これらより、こほろぎ嬢には日常的に頭痛が

あること、その頭痛が悲しみや落胆によつてひどくなる場合があること、またその頭痛は「打たれる」「打ちつけられるという感覺をもたらすことが分かる。頭痛を和らげるために飲まれるのがこの粉薬だから、粉薬は頭痛薬であろう。それならば、もともとこほろぎ嬢には頭痛があつたために粉薬を飲み始め、結果的に常用するようになつたのであらうが、そもそも頭痛の原因はどこにあるのだろうか。

第一節でも述べたように、こほろぎ嬢が粉薬を飲むのは、彼女がある文学史の序文を読んで、しゃあぶの著作が「健康でない文学、神經病に罹つてゐる文学等」であるため出版書肆の主人から嫌悪されたゆえに、文学史の著者たちがしゃあぶを文学史から除いたと知つて、悲哀や落胆をあじわい「頭痛がひどくなつた」時である。そこでこほろぎ嬢は地下室食堂へ行き、頭痛薬を服用し、パンを食べたことによつて「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる」状態を「忘れ」、失調から回復する。しかしこれは本質的な回復ではなく対症療法的な手当てによる回復であると考えられる。薬とパンの摂取後、こほろぎ嬢は「産婆学の暗記者」であると思いついた女性が「暁けがたのこほろぎを踏んで」、その将来の開業が「毎朝繁盛しますやうに」と願う。こほろぎ嬢は「ねんぢゅう、こほろぎなんかのことが気にかかりました」と内的独白をして、自らの精神に添つて親しく存在した対象である「こほろぎ」が、産婆に踏まれることを想像する。

しかし「産婆学の暗記者」は先に確認したように両義的な存在である。したがつて、たとえば産婆になつた女性がこほろぎの鳴き声に親しみを覚えるような、こほろぎ嬢自身の精神や趣向を支持する仲間であると想像してもおかしくはないのだが、こほろぎ嬢はそのような想像をしない。そしてこほろぎ嬢は「あなたはたぶん嗤はれるでしょう」と「産婆学の暗記者」から自分が「嗤はれる」という被害妄想を持つており、彼女を「恐れ」ながら告白をする。その告白は心中での独白であつても「小さい声」であり、「こほろぎ」という名で呼ばれながら、美しく響く声ではないところに、こほろぎ嬢の弱つている様子も見受けられるだろう。

ここからこほろぎ嬢には、「頭を打たれる」感覚を薬や食べ物によつて忘れても、なお被害妄想を持つていてことに繋がるような、薬や食べ物では根幹からは癒されない不安や怖れが、常に存在していると考えられるのではないかだろうか。こほろぎ嬢は文学史の書物を渉猟してもしやあぶについての記述が見つからないことに悲しんでいるが、これは文学史といふ世界のなかで居場所のないしやあぶに、こほろぎ嬢が自己の姿を見出し、共感したゆえの悲しみであるとも言えるだろう。

筆者は先にこほろぎ嬢について次のことを論じた<sup>(24)</sup>。こほろぎ嬢の母親はこほろぎ嬢を経済的に援助していくても、精神的にこの世に繋ぎ留め根づかせる役割はしていない。また

こほろぎ嬢の自己の根底は不安定な状態にある。世界に対する「基本的信頼」を喪失しているこほろぎ嬢が、「しやあぶの物語」に心を捕らわれて探索するさまは、たましいを抜き取られたような状態にある人物が、失つたたましいを取り戻しこの世にとどまろうと試みているかのようであり、「儚い生きもの」であると語られるこほろぎ嬢を、「しやあぶの物語」が世界に対する「基本的信頼」の代替物として支えていふことである。そのような代替物であるしやあぶが文学史という世界から除外されているとこほろぎ嬢が知つたことは、彼女の安心感をゆるがせ、頭痛を引き起こすのに十分であつただろう。

さて、この作品の語り手である「私たち」は、曖昧な情報に影響されながら、こほろぎ嬢や彼女が飲む粉薬について否定的な解釈を有しているが、その実態は「途上の噂ばなし」ほどではないととらえている語り手であることを第一節で論じた。語り手によるこほろぎ嬢への否定的な解釈は、こほろぎ嬢が神經病であることから来ているが、語り手はこほろぎ嬢の神經病の原因を粉薬の飲みすぎに帰している。つまり語り手は神經病や粉薬を否定的にとらえているが、こほろぎ嬢自身を否定的にとらえてはいない。またこほろぎ嬢が桐の花の芳香を拒むことを「よほど罰あたり」と評しながらも、その花の匂いが「神經病」に罹っていることを理由に、幸田当八の怪しげな学説に依拠しつつこほろぎ嬢が桐の花の匂いを

拒むことへの理解を示した。

このような語り手「私たち」の、こほろぎ嬢自身については否定的にとらえることなく、こほろぎ嬢の神経病の原因をこほろぎ嬢自身に帰せず、「悪魔の粉薬」に責任転嫁することでこほろぎ嬢をかばうことにもなる態度には、こほろぎ嬢に対する保護的、支持的な態度が見てとれるのではないだろう。

しかしこの態度は、「神経病」を否定的にとらえることで、「神経病」に含まれる新たな芸術や思想等が展開する可能性を阻んでしまう、つまりこほろぎ嬢が新しい世界で生きていくことを阻んでしまう可能性を結果的に有することにもなる。このようないいながらもしやあぶ・まくろおどが住まう神秘的な世界を知りうとするような、新たな芸術や思想が展開されることよりも、「神経病」ではないことを好ましく思うような語り手「私たち」は、こほろぎ嬢の母と共通する心性を持つているのではないかだろうか。

こほろぎ嬢の母は、おそらくはかつて健康であったこほろぎ嬢の姿を知つており、また田舎と都会と離れて住んでおり、だからこそこほろぎ嬢が「頭の病気」をすれば、その「何倍も心の病気に憑かれて」しまうほど、こほろぎ嬢のことを心配するのである。またこほろぎ嬢自身が、しやあぶ・まくろおどが住まう神秘的な世界を明らかにすることを望んで、その母は娘であるこほろぎ嬢が「頭の病気」「神経病」

になつてまでそんなことをするのは望んでいないだろう。そして健康であつたこほろぎ嬢を知つてゐる目には、こほろぎ嬢がそのようなことを望むのは、こほろぎ嬢自身のせいではなく、「悪魔の粉薬」や「神経病」のせいだと見えておかしくはないだろう。

## (二) こほろぎ嬢の孤独

こほろぎ嬢としやあぶ・まくろおどの孤独に関する共通するところと異なるところを確認しつつ、こほろぎ嬢の孤独について考察したい。こほろぎ嬢は「パン屋の店の女の子」や母親とスムーズな交流ができるず、また「産婆學の暗記者」やまくろおどには、一方的に嬢が話しかけるだけという関係である。こほろぎ嬢は同性同士の連帯関係から疎外されており、「知己に乏しい」と最初に紹介されたように、物語には母親しか知り合いが登場しない。「パン屋の店の女の子」や母親などとの経済的に必要な社交のほかに「こころこまやかな」交流をする相手の存在は語られず、こほろぎ嬢が孤独な存在であることがうかがえる。

他方でしやあぶは地上の現実の世界では同性同士の交際から外れていたように語られ、その点ではこほろぎ嬢と同様に孤独な人物であるように見える。しかしこほろぎ嬢とは異なり、しやあぶを心配する母親の存在や経済的苦境が語られることはなく、それに彼には「こころこまやかな」やりとりを

する相手であるまくろおどがいる。その死後には文学史の世界で除外されるという憂き目に遭うが、これは生前に出会うことのなかつたような仲間と共に除外されているということでもある。しやあぶには、恋人や、共に文学史から除外される仲間がいることから、地上の現実世界以外では一概に孤独な人物であるとは言えないだろう。

こほろぎ嬢とまくろおどとを比較すると、こほろぎ嬢はしやあぶに恋をして文学史の世界に彼を探しにゆくが、彼は影が薄くほとんど見つからない。これは恋の相手と交流しようとしても出来ないことを意味する。他方まくろおどもしやあぶに恋をした人であるが、彼女はしやあぶの元にゆき、艶書を交わすことも出来た。またこほろぎ嬢が草臥れた外套を着て古靴を持つてしたり、こほろぎ嬢のいる地下室食堂の空気まで「古ぼけた」ものであつたと語られ、こほろぎ嬢に「古い」ということが関わる場合、否定的に語られるが、まくろおどの場合は「古風なものがたり」「私たちの国のならひにしたがへば」または「つたんかあめん時代」より伝わる香料などと、古さが伝統的なものや高貴なものへ繋がり、価値あることのように語られる。

このようにこほろぎ嬢にはしやあぶとは異なつて恋人や仲間がなく、「まくろおど」とも対照的に片恋を味わい、「古い」という性質が肯定的な価値をもつこともない。

またこほろぎ嬢が図書館で地下室食堂に降りても安らぎや

なぐさめになるような同性たちとの交流はなかつたことは、地上という意識的な場のみでなく、こほろぎ嬢が書物の探索を通して、また心の深い層に降りても、肯定的な女性像を見つけられないという孤独の象徴のようである。

### (三) まくろおどへの問いかけ、「頭を打たれる感覚」

物語の最後にこほろぎ嬢は「おおふいおな・まくろおど！」あなたは女詩人として生きてゐらした間に、科学者に向つて、一つの注文を出したいたと思つたことはありませんか——霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法。私は年中それを願つてゐます。でも、あまり度々パン！パン！パン！て騒ぎたかないんです」と「ふいおな・まくろおど」に向かつて問い合わせる。この問いかけの意味について考察したい。

まず、このせりふにおける「でも」の後には「それは無理な願いかもしれない、でも」というような語句が省略されていると考えられる。この問い合わせはまくろおどへの問い合わせである。しかしこれは「科学者」に幸田当八のような心理研究の学徒を重ね合わせた上ででの問い合わせではないだろうか。こほろぎ嬢のまくろおどに対する問い合わせを詳しく言い換えてみよう。まくろおどという「肉体のない」女詩人が「(男性の肉体の上)で、たましひのみの存在として」生きて「いた間に、「科学者」(たとえば心理研究の学徒)に向つて「霞」を「吸う」という「まくろおど自身やしやあぶが書いたよう

な詩」を「読む」ことによつて、「人のいのちをつなぐ」すなわち人間がものを食べずに生きる方法を明らかにしようという注文を出したいと思わなかつたか。

「しやあぶの物語」の語り手は「今後時を経て（略）しやあぶの魂をあばく心理医者も現はれるであらう」「（心理医者や詩人が）動けば動くだけ、ゐりあむ・しやあぶの住んでゐたみすてりの世界は崩されるであらう」と述べたが、こほろぎ娘がまくろおどに問い合わせていることは、まくろおどが「みすてりの世界」を自ら崩して秘密を明かそうと思わなかつたのかと問い合わせていることになるのではないだろうか。この問いへの答えは、心理医者が「しやあぶの魂をあばく」ことで判明する可能性がある。しかしそれによつてまくろおどの特殊性、つまり「みすてり」の性質が失われる可能性があり、ひいてはまくろおどという存在の消失に繋がる可能性もあるだろう。この問にはこほろぎ娘の反逆的な心情のきわまりを見ることができよう。まくろおどの神秘性や存在の秘密を知ろうとすることは、それらが解明されることを望んでいない価値観の持ち主にとっては「冒涜」でもあるだろう。そのような他者の価値観に大きく影響されてしまうほど弱つているこほろぎ娘は、自らの願いに対する他者の価値観による罰として「頭を打たれる」感覺にさいなまされるのではないだろうか。

この間に、「肉身を備へ」て存在することに対するこほろぎ娘は、自らの願いに対する他者の価値観による罰として「頭を打たれる」感覺にさいなまされるのではないだろうか。

こほろぎ娘の違和感が見られるることは言うまでもないが、他方でこほろぎ娘は「肉身」があるゆえに、パンという食べ物に「没頭」したり薬を服用するという「肉身」への働きかけによって、心に変化が起こり「ひどく打ちつけられてゐる事実」を「忘れる」ことも出来る。しかし仮にこほろぎ娘が経済的に恵まれ、母親から経済的援助を受ける必要がなくなり、必要な食べ物や薬が手に入り、あるいは「霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法」が判明したとしても、「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という感覺にすぐ見舞われたり、被害妄想を持つような心身の状態から回復し、世界への基本的信頼が回復しなければ、こほろぎ娘の苦悩は癒えないのでないだろうか。こほろぎ娘の最後の独白は「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という感覺を「魔の粉薬」やパンによつて麻痺させた上で発想され、出てきた言葉である。この麻痺のない状態で、ただ「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」感覺を味わっているこほろぎ娘の苦悩や孤独感は、反逆的な心情と表裏を成しているものと考えられよう。

### おわりに

「こほろぎ娘」の末尾の一文は「地下室食堂はもう夕方であつた。」である。「夕方」とはこほろぎ娘が読んだ「古風なもの」がたり」のなかで、しやあぶとまくろおど二人が寄り添つて大空の星々をながめていた時刻でもある。地下室食堂

の中での「こぼろぎ嬢」の孤独と、しゃあぶ・まくろおどの「人の世のあらゆる恋仲にも増して、こころこまやか」であった関係とは対照的であり、「こぼろぎ嬢」の索漠とした孤独感が際立つて作品が閉じられる<sup>(2)</sup>。「こぼろぎ嬢」は、図書館でしやあぶとまくろおどがやりとりした詩を読みたかったのであるけれども、それらの詩が見つかって読めていたら、その詩はこぼろぎ嬢の何らかの期待にこたえるものであり、「こぼろぎ嬢」の「頭を打たれる」感覚は、ひとときでも癒えただろうか。

筆者は先に「こぼろぎ嬢」の前に発表された尾崎翠作品「歩行」について、神経の疲れた人物がその心境に適合している詩を読むことによつて、その神経の疲れが癒される可能性が描かれていることを論じた<sup>(3)</sup>。「歩行」とは対照的に「こぼろぎ嬢」では、神経の疲れた人物において、その心境に適合する詩が見つからず、神経の疲れも癒されることはなく、「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という苦痛や苦悩、孤独感を味わつてゐる様子が描かれている。

「こぼろぎ嬢」とほぼ同時期に執筆・発表された尾崎翠作品「地下室アントンの一夜」は、「こぼろぎ嬢」に対して男性詩人が主人公であり、男性が地下室に集う作品である。しかし「こぼろぎ嬢」とは対照的に、作品の末尾には「爽やかさ」が用意されている。「地下室アントンの一夜」についての検討は次稿にゆずりたい。

## 注

(1) 近藤裕子「匂いとしての〈わたし〉—尾崎翠の述語的世界」(初出『日本近代文学』第五七集 日本近代文学会 一九九

七・十 近藤裕子『臨床文学論』彩流社 二〇〇三 所収)

(2) 竹田志保「尾崎翠「こぼろぎ嬢」論—「少女共同体」と「分裂」」(『学習院大学大学院日本語日本文学』第六号 学習院大学 大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻 二〇一〇)

(3) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館 二〇〇〇)、李曉梅『枕草子』の「木の花は」段における「桐の木の花」条について——李嶠の『桐』詩などの漢籍にかかるわって——(『言語文化論叢』第七号 広島女学院大学大学院言語文化研究科 二〇〇四・三)を参照した。

(4) ただし中世の歌人正徹『草根集』所収歌に「ちり過ぎし外面の桐の花の色に面影近くさく桟かな」があり、近世には小澤蘆庵『六帖詠草』所収歌に「みどりなる広葉がくれの花散りてすずしくかかる桐の下かぜ」等がある。桐の花が和歌にまつたく詠まれなかつたわけではないが、数少ない用例と考えられよう。

(5) 大谷雅夫「歌と詩のあいだ」(『歌と詩のあいだ——和漢比較文学論攷』岩波書店 二〇〇八)また『萬葉集』におけるこのろぎの歌については中嶋真也「湯原王蟋蟀歌小考」(『駒澤国文』第四六号 駒澤大学文学部国文学研究室 二〇〇九・二)も参照した。

(6) 高柳祐子「きりぎりす」詠の変遷』(『鳥獸虫魚の文学史一

日本古典の自然観3 虫の巻所収 三井書店 二〇一二)

(7)『新古今和歌集』の引用は、『新古今和歌集』(田中裕・赤瀬信吾校注 岩波書店 一九九二)による。

(8) 川崎賢子『尾崎翠 砂丘の彼方へ』(岩波書店 二〇一〇)

(9)『現代文芸読本 教授資料 卷二』国語教育研究会編(永

沢金港堂 一九二六)、『女子現代文芸読本 教授資料 卷二』

国語教育研究会編(永沢金港堂 一九二六)、『公共文化読本

教授資料 卷二』溝江八男太(永沢金港堂 一九二六)、『女

子文化読本 教授資料 卷二』溝江八男太(永沢金港堂 一九

二六)等が河井醉茗「こほろぎ」について紹介している。

(10) 石井和夫「風のゆくえ——「こほろぎ姫」と「猿面冠者」

(福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第七十号 福岡女子

大学 二〇〇六・三)

(11) 日出山陽子「こほろぎ姫」と蟋蟀をめぐって(日出山陽子

『尾崎翠への旅一本と雑誌の迷路のなかで』 小学館スクウ

エア 二〇〇九 所収)で日出山氏は次のことを指摘されている。

尾崎はウイリアム・シャープを讀えた「詩二篇 神々に捧

ぐる詩」の「ギリアム・シャープ」(『曠野』一九三三・十一)

において『学生版 小泉八雲全集』に言及しているが、「草雲雀」

は『学生版 小泉八雲全集』第七卷(第一書房 一九三一)に

収録されているため、尾崎も読んだ可能性がある。なお草雲雀

は蟋蟀に似た昆虫で八九月頃に美しい声で鳴く虫であること

も日出山氏が紹介している。

(12) 西横偉「響き合うテキスト—豊子愷と漱石、ハーン」(『日本研究』第三十三集 国際日本文化研究センター 二〇〇六年十において、ハーン「草ひばり」と関連して、平川祐弘『ラフカディオ・ハーン 植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房 二〇〇四)を援用して指摘されている。

(13)「古風な書き出し」が『伊勢物語』第二十一段の冒頭部と全く同じであることは、佐々木孝文氏より教示を受け、拙稿「第七官界彷徨」と翠(『郷土出身文学者シリーズ⑦「尾崎翠』所収 鳥取県立図書館 二〇一一・三)で言及した。なお「こほろぎ姫」の典拠と考えられるウイリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの物語については、森澤タ子「尾崎翠の両性具有への憧れ—ウイリアム・シャープからの影響を中心にして」(『同志社国文学』第四八号 同志社大学国文学会 一九九八・三)において、木村毅「個人内に於ける両性の争闘」(『新潮』一九二〇・十二、尾崎翠「松林」も掲載された号)等を挙げ、詳細に論じられている。「こほろぎ姫」における「しゃあぶの物語」は実在したウイリアム・シャープの伝記事項に忠実ではなく、木村毅等の資料を元に尾崎翠が自由に創作したと考えられることを森澤氏は指摘している。

(14) 仁政平人「翻訳 の文芸学——尾崎翠テクストの分析を手がかりに——」(『文芸研究』第一七一集 二〇一一・三 日本文芸研究会)に、ジョシニア・モストウ「みやび」とジエンダ

- 近代における『伊勢物語』——（ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典 カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社 一九九九・四）を参照して、「和歌」による恋愛コミュニケーションを描き出す古典（カノン）として「伊勢物語」は作中に召喚されていると見ることができる。「同時代（一九二〇年代前後）における「伊勢物語」評価と対応していると考えられる」という指摘がある。なおモストウ氏の前掲論文には吉川秀雄『新註伊勢物語』（精文館書店 一九二六）について「吉川の歴史観の背後には、古代の日本では和歌が会話の主な手段であつたという認識があり、これは少なくとも一九二〇年代には一つの通念となつていていたようである。」とある。
- (15) 渡邊綾香「分身と分心 — 尾崎翠『こほろぎ姫』」(二〇〇〇年度昭和文学学会秋期大会研究発表資料)
- (16) 「しやあぶの物語」に関わるジエンダーの問題として、内海紀子氏が「フラグメントと再構築——太宰治『道化の華』、尾崎翠『こほろぎ姫』」(『太宰治スタディーズ』第三号 「太宰治スタイルーズ」の会 二〇一〇・六)において次の指摘をされている。「作中で姿を見せない『ふいおな』について、口さがない詩人たちが彼女の容貌や肉体についてしつこく取沙汰していたことを想起したい。もしこのシーケンスが、女性作家の作品よりも彼女自身に関心が寄せられがちな文学場のある種の傾向の、パロディだとしたら。」
- (17) 川崎賢子氏の前掲書に次の指摘がある。「自分自身の『分身』

- を見た〈私〉は死にいたる破滅が待ち受けている、それを裏返しに、死に近い〈私〉のまえに靈としてあらわるのが「分身」であるというのが、文学装置としてのドンペルゲンガーをめぐる呪いの定型だ。」また「詩二篇 神々に捧ぐる詩」の「ヰリアム・シャアブ」についても次のように論じられている。この言及は「こほろぎ姫」で描かれたしやあぶ・まくるおどの関係にも当てはまると考えられる。「この表象をドンペルゲンガーの概念で説くことは、かなり無理が、いや、飛躍があるだろう。分心（分身）が、〈私〉を損なうことなく、むしろエロティックに、半身を抱きしめるプラトン的恋愛に近しい表象であること、西洋近代的なドンペルゲンガー表象の歴史的意味に照らすなら例外的といえる。」
- (18) 富士川義之氏は「分身の研究」(『海燕』一九八五年十月号 福武書店)において、ウイリアム・シャアブとフィオナ・マクラウドの関係を「自分がもうひとりの自分を意識的・意図的に創り出すという行為が、本質的にファルスの要素を内包させている」と論じられている。
- (19) 「侏儒の言葉」の引用は『芥川龍之介全集』第十三巻（岩波書店 一九九六）による。尾崎翠は芥川の『梅・馬・鶯』を愛読しており、「侏儒の言葉」も読んでいた可能性がある。
- (20) 末國善己「異端・図書館・分身—尾崎翠『こほろぎ姫』」試論(『尾崎翠作品の諸相』 専修大学大学院文学研究科畠研究室 二〇〇〇) 末國氏は、こほろぎ姫が通う図書館の閲覧が有

料だった可能性が高いと考えられること、また「せつせと図書館通い」を続けるのも、館外貸出が有料だったからという、穿った見方さえ可能」ということも指摘されている。

(21) 竹内佳代「町子のクイアな物語——連作としての尾崎翠『第七官界彷徨』『歩行』『こぼろぎ姫』——」(『国文』第一二〇号

お茶の水女子大学国語国文学会 一〇〇八・一二)

(22) リヴィア・モネ「サロメという故郷 尾崎翠の『映画漫想』におけるナジモヴァ論、変装のドラマツルギー、そして女性映画文化宣言」(『尾崎翠国際フォーラム』鳥取2004 報告集

vol.4 「尾崎翠国際フォーラム」実行委員会 一〇〇四)

(23) B・エーレンライク、D・イングリッシュ著 長瀬久子訳『魔女・産婆・看護婦——女性医療家の歴史』(法政大学出版局 一九九二)等、魔女についての研究書で言及されている。

(24) 拙稿「尾崎翠の詩と病理——『こぼろぎ姫』『地下室アントンの一夜』を中心に」(『和漢語文研究』第五号 京都府立大学国中文学会 一〇〇七・十二)

(25) 岩田宏「感情との戦い——『尾崎翠全集』を読んで——」(『本と批評』一九八〇年七・八月合併号 日本エディタースクール出版部)に、こぼろぎ姫の「産婆学の暗記者」への語りかけについて次の指摘がある。「行きずりの人への無言の語りかけ

が人間的なあたかみに溢れていればいるだけ、女主人公の孤独と悲哀は確実に伝わってくる。」

(26) 拙稿「尾崎翠『歩行』論——おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ——」(『阪大近代文学研究』第十一号 大阪大学近代文学研究会 一〇一三・三)

#### 【付記】

小稿は、第二回「尾崎翠フォーラム」でのパネルディスカッション「尾崎翠の見た夢は……」での発表と討論を元にまとめた拙稿「尾崎翠と和歌・短歌——『こぼろぎ姫』を中心に」(『尾崎翠フォーラム』鳥取2002 実行委員会 一〇〇二)および「尾崎翠の詩と病理——『こぼろぎ姫』『地下室アントンの一夜』を中心に」(前掲)、「第七官界彷徨」と翠(前掲)を元に、改稿・補筆したものである。パネルディスカッションに際してお世話になり、ご教示をいただきました皆様に深謝いたします。

(いしはら・みよ／京都府立大学大学院学術研究員)